

やなせたかしの童話における『フランケンシュタイン』の受容

道 合 裕 基

はじめに

メアリー・シェリー (Mary Shelley, 1797–1851) の『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein* 1818) は、科学者による<人造人間>の製造のモチーフを採り上げ、後世の文学作品や映画等に多大な影響を与えた。有名なものとしては、アーシュラ・K・ル=グウィン (Ursula Kroeber Le Guin, 1929–) の『ゲド戦記 影とのたたかい』 (*A wizard of Earthsea* 1968)、映画では『ブレードランナー』 (*Blade Runner* 1982) などが挙げられる。一方、日本における『フランケンシュタイン』の受容については、いつ、どのように翻訳・紹介がなされたかという研究はあるが、日本の文学者の創作に与えた影響があまり論じられないことがない。このような状況を踏まえた上で、本稿では、日本における『フランケンシュタイン』の受容の事例として、やなせたかし (1919–2013) による童話「アンパンマン」(1968) と「キュラキュラの血」(1968) について考察する。

1. 「アンパンマン」にみる『フランケンシュタイン』の受容

1.1 外見の親近性について

「アンパンマン」は、現在でも児童向けアニメが放送されており、子どもを対象として根強い人気を誇っている。「アンパンマン」は、元々は、やなせが発表した童話や絵本の主人公であった。意外なことに、「アンパンマン」の着想源は、『フランケンシュタイン』であるということをやなせが語っている。¹⁾「アンパンマン」は、生命をもったパンのヒーローである。やなせは、中学生のとき、有名なジェームズ・ホエール (James Whale, 1889–1957) 監督の映画『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein* 1931) を見ている。その映画の記憶は衝撃的だったようで、後にやなせが語っているところによれば、「アンパンマン」の元となるパンが生命をもつというモチーフを、そこから思い付いたという。ちなみに、やなせは原作も読んでいるようである。²⁾

『フランケンシュタイン』と「アンパンマン」のあいだには、一見するとその受容の痕跡を認めることは難しい。一方は、創造主からさえ忌避される醜い怪物、他方はヒーローである。しかし、童話「アンパンマン」の主人公であるアンパンマンは、着想源である『フランケンシュタイン』の怪物との親近性をもっている。以下に、童話「アンパンマン」の概略を紹介する。

【童話「アンパンマン」の概略】

童話のアンパンマンは、不格好な飛行能力を持った人間で、正義の味方である。飢餓に苦しむ人のいるところに大量のアンパンを渡しに行くという地味な活動をしている。子どもからも喜ばれず、「カッコワライ!」と言われる始末。スーパーマンやバットマンなどの他のヒーローから、その外見がヒーローの面汚しであると酷評される。だがアンパンマンは、そんな評価を気にせず、飢えに苦しむ人々を助ける。ある日、アンパンマンは、戦火によって生じた飢餓に苦しむ人々のもとへ赴くが、彼の地で高射砲により狙撃されてしまう。その後、アンパンマンがどうなったのか分からないというように結ばれる。

アニメ・絵本の「アンパンマン」とは異なり、救いのない物語である。この童話を絵本にする際に、やなせは、人間という設定から生命をもったパンというように変更し、救いのないストーリーが改められている（戦争のない日常世界を舞台に、アンパンマンの活躍を描く）。

＊

続いて、『フランケンシュタイン』から「アンパンマン」への受容を具体的に概観していきたい。フランケンシュタインは、自らの野心のために怪物を創造したが、アニメ版のアンパンマンは、流れ星がパン工場の煙突に入り、そこで焼かれていたアンパンに生命が付与されることで偶然誕生している。意図して創造された怪物と、偶然誕生したアンパンマンという相違がある（ただし、怪物はフランケンシュタインの望んだものにはなっていない）。原作の童話では、人間として設定されていたアンパンマンだが、『フランケンシュタイン』の怪物と類似点をもつ。アンパンマンと怪物との類似点は、まず、その外見である。アンパンマンは、アニメでのイメージと異なり、醜いとまではいかないが、不格好でヒーローの外見ではない。次に掲げるのは、『フランケンシュタイン』の怪物の外見描写と「アンパンマン」の外見描写である。

His limbs were in proportion, and I had selected his features as beautiful. Beautiful! —Great God! His yellow skin scarcely covered the work of muscles and arteries beneath; his hair was of a lustrous black, and flowing; his teeth of pearly whiteness; but these luxuriances only formed a more horrid contrast with his watery eyes, that seemed almost of the same colour as the dun-white sockets in which they were set, his shriveled complexion and straight black lips. (Shelley 58)

スーパーマンみたいにかっこよくなかったのです。全身こげ茶色で、それにひどく太っていました。顔はまるくて、目はちいさく、はなはだんごばなで、ふくれたほっぺたはピカピカ光っていました。(中略)とんではいいましたが、

なんだかおもしろそうでヨタヨタしていました。（「アンパンマン」 63）

怪物の外見は、フランケンシュタインが美しい「材料」を集めたにもかかわらず、醜悪な外見になっている。引用に続く箇所では、フランケンシュタインが、怪物の外見を「蘇生したミイラ」よりも醜いと評していることから、怪物がいかに醜いかが示されている。アンパンマンの外見は、怪物ほど醜い訳ではないが、「かっこよく」ない。しかし、アンパンマンは自身の外見のことを気にせず、飢えている人々を助ける。この点で『フランケンシュタイン』の怪物とは異なる。怪物は、自身の外見の醜さを認識しており、その醜さゆえに拒絶されたことが元で、悪の道に走る。外見と内面の不一致が原因で生じた悲劇であるが、誕生して間もない怪物とアンパンマンは、内面の善良さと反する外見をもつ者として共通する。

1.2 子どもとの接触

アンパンマンは、子どもにアンパンを渡すが、他のお菓子をねだられ、「カッコワリイ！ あんなのダメだなあ」と罵られている。「アンパンマン」のこの場面は、『フランケンシュタイン』で怪物が、フランケンシュタインの弟ウィリアムに罵られる場面を想起させる。怪物は、子どもがまだ偏見に毒されていないので、教育すれば、自分の仲間として共存出来ると考え、ウィリアムを捕まえるのだが、悲惨な結果に終わる。次に掲げるのは、ウィリアムと怪物とのやりとりである。

As soon as he [William] beheld my form, he placed his hands before his eyes, and uttered a shrill scream; I [Monster] drew his hand forcibly from his face and said, “Child, what is the meaning of this? I do not intend to hurt you; listen to me.”

He struggled violently. “Let me go” he cried; “monster! Ugly wretch! You wish to eat me and tear me to pieces —You are ogre—Let me go, or I will tell my papa.”(Shelley 144)

罵られる過程で怪物は、ウィリアムをフランケンシュタインの一族と知り、発作的に殺害してしまう。ここでの怪物とウィリアム（子ども）との接触は、不幸な結果を引き起こした。

アンパンマンは、怪物ほど口汚く罵られていないが、子どもに善意で渡したアンパンを拒絶され、外見のことを馬鹿にされている。このウィリアム（子ども）との接触により、怪物が最初の殺人を犯し、悪の道に走っていくのに対し、アンパンマンは、「私は何度でもアンパンを運んでくるぞ」と子ども達を含めた人類への愛を失

うことがないというように、対照的に描かれている。

1.3 外見への誹謗・中傷

すでに、『フランケンシュタイン』の怪物とアンパンマンの外見については、簡単に言及したが、「アンパンマン」では、ヒーローであるバットマンやスーパーマンが、アンパンマンのことを批判する。この呼びかけにより、他の人間たちもアンパンマンを批判するようになる。次の引用は、スーパーマン達が、アンパンマンを批判する場面である。

「みろ！ 諸君。またニセモノだ。あんなうすぎたない奴のためにわれわれまで悪口をいわれる。」みあげるとふとつちよのアンパンマンが汗だくでとんでいました。みんないっせいに「ニセモノおっころ」とさげびました。（「アンパンマン」 66）

アンパンマンは、善行を施しているが、外見のために「うすぎたない」、「ニセモノ」呼ばわりされる。フランケンシュタインも被造物である怪物に対し、“fiend”、“demon”と呼び、蔑んでおり、ウィリアムも “monster”、“wretch”、“ogre” と怪物を罵っている。この外見の誹謗・中傷の結果、怪物は、内面までも＜怪物＞化してしまうが、他方アンパンマンは、外見についての誹謗・中傷を気にしていない。

1.4 報われない善意

「アンパンマン」では、結局アンパンマンの善意が、報いられることはない。子どもにアンパンを渡しても別の食べ物が欲しいと言われ、最後は、高射砲に撃たれ生死不明である。アンパンマンの報われない善意は、怪物が敬愛するド・ラセー一家のために薪を集める行為などが報われずに拒絶される場面や、溺れかけた少女を救助し、狙撃される出来事などを、彷彿とさせる。次に引用するのは、怪物がド・ラセー一家のために薪を施す場面と、ド・ラセー一家から交際を拒絶される場面である。

I [Monster] remember, the first time that I did this, the young woman, when she opened the door in the morning, appeared greatly astonished on seeing a great pile of wood on the outside. She uttered some words in a loud voice, and the youth joined her, who also expressed surprise. I observed, with pleasure, that he did not go to the forest that day, but spent it in repairing the cottage and cultivating the garden. (Shelley 114)

At that instant the cottage door was opened, and Felix, Safie, and Agatha entered. Who can describe their horror and consternation on beholding me? Agatha fainted, and Safie, unable to attend to her friend, rushed out of cottage. Felix darted forward, and with supernatural force tore me from his father, to whose knees I clung: in a transport of fury, he dashed me to the ground and struck me violently with a stick. (Shelley 137)

怪物は、善意を目に見える形にしたが、彼の外見がもたらす恐怖により、関係を結ぶことを拒絶されている。アンパンマンの善意もまた、彼の外見が原因で同じように拒絶される。善意よりもその行為者の外見により、その善意が善意と認識されない悲劇がここにある。

結末で、怪物は、フランケンシュタインの死を見届けた後、火の中に身を投じ、自死するということをウォルトンに告げる。アンパンマンも高射砲で撃墜され生死不明である。この結末については後述するが、『フランケンシュタイン』、「アンパンマン」ともに、報われない善意が描出されている。

1.5 火のモチーフについて

怪物が火に身を投じるというのは、『フランケンシュタイン』の副題、「現代のプロメテウス」を反映しているのだろう。実際、作中でプロメテウスに相当するのは、フランケンシュタインであるが、プロメテウスと彼がもたらした火の関係性から連想した展開と言える。

一方、アンパンマンは、「火」によって象徴される戦争で混乱した地域に自ら赴き、狙撃されている。怪物が自発的に火に身を投じると明言するのに対し、偶然狙撃されているという違いはあるが、アンパンマンが激戦地に赴いたのは、自身の意思によるものであり、火による「最期」が示唆される点で共通する。また、アンパンマンが、高射砲という「火」の系譜に属する道具で、生命を脅かされるという点も、プロメテウス神話、『フランケンシュタイン』からの連続性をうかがわせる。「アンパンマン」、『フランケンシュタイン』ともに、「新しい火」³⁾という形で火を描いている。

1.6 結末について

『フランケンシュタイン』、「アンパンマン」それぞれの結末において、怪物もアンパンマンも生死不明である。怪物は、ウォルトンに火の中に身を投じるつもりだと告げるが、本当に火に身を投じ、死んだのかどうかは明確にされていない。アンパンマンも高射砲で狙撃され、墜落しているが、語り手は次のように結んでいる。

アンパンマンはどうなったのか、それはわかりません。しかし、決して死に

はしないでしょう。世界中のおなかのすいた子どもたちのために、アンパンマンは、今もとびつづけているはずです。（「アンパンマン」 67）

アンパンマンの生死が明確にされず、「今もとびつづけているはず」という希望が示される。では、『フランケンシュタイン』では、どう表現されているか。次に引用するのは、怪物が立ち去る『フランケンシュタイン』の結末部分である。

He [Monster] sprung from the cabin window, as he said this, upon the ice-raft which lay close to the vessel. He was soon borne away by the waves, and lost in darkness and distance. (Shelley 225)

引用箇所では、怪物が、闇の中に消えたことが示されるだけで、その生死は明確にされない。『フランケンシュタイン』と「アンパンマン」はともに、「閉じられた終わり」ではなく、「開かれた終わり」が提示されている（廣野, 2005）。怪物の生死とヒーローの生死という相違点はあるが、「開かれた終わり」の提示という共通点が見られる。

以上、怪物とアンパンマンの外見、およびその外見に対する批判、報われない善意、火のモチーフと「開かれた終わり」などの共通点が見られた。これらの共通点を通して、やなせが、「アンパンマン」を創作する上で、『フランケンシュタイン』をいかに受容したかを概観した。やなせは、『フランケンシュタイン』に加え、戦後の貧困体験、メーテルリンク (Maurice Meeterlinck, 1862–1949) の『青い鳥』(L' Oiseau Bleu 1908) の妖精などをその他の着想源としている。それらが、『フランケンシュタイン』と合体してアンパンマンになったと思う（『アンパンマンの遺書』 199）と述べているように、『フランケンシュタイン』の影響がいかに大きかったかがうかがえるだろう。⁴⁾ その結果として、「アンパンマン」は、フランケンシュタインの創造した怪物のように、様々な材源が繋ぎ合わされて生み出された作品となった。

2. 「キュラキュラの血」における受容

2.1 怪物の登場

次に、「キュラキュラの血」における『フランケンシュタイン』からの受容の痕跡について考察する。「キュラキュラの血」は、「アンパンマン」と異なり、やなせが『フランケンシュタイン』からの影響を明言している訳ではない。だが、『フランケンシュタイン』には直接、言及されていないものの、やなせが、『フランケンシュタイン』の映画や原作を享受しており、「アンパンマン」の着想源としたことを考慮するならば、「キュラキュラの血」にもその受容の痕跡がうかがわれてもおかしくはない。以下、「キュラキュラの血」の梗概を紹介し、『フランケンシュタイン』からの

影響関係について考察する。

【「キュラキュラの血」の梗概】

「キュラキュラの血」は、キュラキュラという怪物と人間とのあいだに起こる悲劇が描かれる。キュラキュラは、山の奥深くに住み、その姿を見た者を恐怖させる。そのキュラキュラを退治しに、キリという若者が山に入っていく。しかし、キリは戻らず、兄のキルが弟を探しに山に入る。山の中で、醜いキュラキュラがキリの上に屈みこんでいるのに遭遇する。キルは、機会を捉え、キュラキュラに矢を命中させることに成功する。だが、実際は、キリは谷に落ち、キュラキュラに助けられたのだった。キルが見たのは、キュラキュラが薬草を飲ませるため屈んだのを、危害を加えようとしていると誤解したのだった。死にゆくキュラキュラは、キルの判断は当然としてキルを許す。そして一年後、キュラキュラの流した血のような赤いヒナゲシの花が咲くようになった。

外見の醜さによる誤解が招いた悲劇であり、「アンパンマン」と同じくあまり救いが無い。

＊

まず、『フランケンシュタイン』と「キュラキュラの血」では、共通して怪物が登場する。ちなみに、「キュラキュラの血」に登場する怪物キュラキュラの名前の材源は、ブラム・ストーカー（Abraham Bram Stoker, 1847-1912）の小説『吸血鬼ドラキュラ』（*Dracula* 1897）である。これは、やなせ自身が、「解説」に「お察しのごとく、ドラキュラから名前をもらいました」と示していることから裏付けることが出来る。⁵⁾ただし、『フランケンシュタイン』の怪物は、人工的に生み出された存在であるが、キュラキュラは、他の星から来たと簡単に言及されているのみで、人工的に生み出されたのか否かは明言されない。このように、出自の相違が見られるが、怪物もキュラキュラも言語を解し、複雑な思考にも耐えうる。また、情緒面についても様々な感情を知っており、同情などを示している。そして云われなき迫害を受ける存在という点で、共通する。

キュラキュラが今際に、キルに語る「私からみれば、あなたたちがお化け」に見えたという恐怖の感情が、「怪物とは何か」という問題提起を行っている。キュラキュラは、人間の外見に恐怖を感じたために、山中深くに隠れていたのである。この問いかけは、『フランケンシュタイン』の怪物にも該当することである。「怪物とは何か」という問いは、後述する外見の美醜の問題とも重なってくる。

2.2 外見がもたらす誤解

キュラキュラは、その醜い外見から恐ろしい怪物と思われ、村人達から忌避される。この恐ろしい外見が災いし、キルに誤解を与え、その命を失う。キュラキュラがキルに矢を射られる場面は、『フランケンシュタイン』で、怪物が川に落ちた少女

を救出し、その父親と思しき男から銃撃される場面を想起させる。次に引用するのは、狙撃された怪物が森に逃げ込むまでの件である。

On seeing me [Monster], he [the girl's father] darted towards me, and tearing the girl from my arms, hastened towards the deeper parts of the wood. I followed speedily, I hardly knew why; but when the man saw me draw near, he aimed a gun, which he carried, at my body, and fired. I sank to the ground, and my injurer, with increased swiftness, escaped into the wood. (Shelley 143)

怪物は、この仕打ちに激怒し、人類に復讐を誓うことになる。一方のキュラキュラは、自分が誤解により殺害されることを当然の行動として許している。次に引用するのは、キュラキュラがキルに矢を射られる場面である。

怪物はなにかの上にしゃがみこんでいます。だんだん近づいてよくみると、それは弟のキルではありませんか。顔は青白く、ぐったりと岩の上にたおれています。キルは弓に矢をつがえてねらいをさだめました。「もしこの矢がはずれたら、弟も、そして自分も怪物にくわれてしまうだろう。神さまどうかおまもりください。」キルは心にいのりながら矢をはなしました。キルの矢はみごとに怪物の背中にグサリとささりました。(「キュラキュラの血」113)

キュラキュラが射られるのは「矢」で、怪物は「銃弾」を撃ち込まれるという相違があるが、キュラキュラも怪物も善行が悪意の現れと誤解され、迫害を受けている。この誤解は、行為者である怪物たちの外見の醜さに起因している。怪物は、2メートル44センチも身長があり、全体的に「歪み」があり、「蘇生したミイラよりも醜い」とされる。キュラキュラは、二足歩行ではあるが、全身体毛に覆われ、眼は一つで、口が耳まで裂けている。『フランケンシュタイン』の怪物よりも人間の外見からは程遠いと言えるだろう。

キュラキュラは、この自身の＜異形＞性を認識しており、自分がキルの立場であったならば、キルと同じようにしたとして、寛大にキルを許している。一方の怪物は、キュラキュラのように、このような仕打ちが「当然のこと」とは思わず、理不尽さに憤然としている。しかし、怪物もキュラキュラも自らの＜異形＞性を認識している点では同じである。

古生物学者のスティーヴン・ジェイ・グールドは、フランケンシュタインが、怪物を見捨てた行動について、「醜形忌避」という本能が要因であるとし、同情しつつも、彼の創造主としての責任放棄を批判している（グールド、2000）。グールドは、フランケンシュタインの「醜形忌避」を指摘しているが、この醜さの問題に関連し、

やなせは、「キュラキュラの血」におけるキュラキュラの境遇は、「醜悪とか美とかいうものの基準は何かという、私のいつもの主題」を描いたと解説している（『十二の真珠』126）。ここでやなせの言う「醜悪と美」の主題は、「キュラキュラの血」だけでなく、『フランケンシュタイン』にも該当する主題である。怪物は、知性をもち、善良であったにもかかわらず、その外見が醜いために人間達から拒絶される。この内面と外見の乖離が、怪物にとっての不幸をもたらしたのである。

外見がもたらす誤解を受けるのは、怪物だけでない。アンパンマンは、外見がヒーローとして相応しくないと酷評され、キュラキュラは善良な内面をもっているが、邪悪で凶暴な怪物として恐れられ、命を落とす。怪物、アンパンマン、キュラキュラは、ともに外見による差別と偏見を受けている存在であり、三者三様に不幸である。「醜悪と美」は、『フランケンシュタイン』、「アンパンマン」、「キュラキュラの血」を貫く主題と言えるだろう。

2.3 人類との関係について

前節で指摘したように、怪物もキュラキュラも人間に善行を施すが、その醜さゆえに迫害されていた。怪物は、その対応に対して、人類への復讐を誓い、内面も次第に＜怪物＞化していく。以下に掲げるのは、怪物が人類に復讐の誓いをする場面である。

This was then the reward of my benevolence! I had saved a human being from destruction, and as a recompense I now writhed under the miserable pain of a wound which shattered the flesh and bone. The feelings of kindness and gentleness, which I had entertained but a few moments before, gave place to hellish rage and gnashing of teeth. Inflamed by pain, I vowed eternal hatred and vengeance to all mankind. (Shelley 143)

怪物の人類との接触・交流は外見の醜さゆえに忌避され、怪物が人類と友好的関係を構築していくことは、困難なものとなっている。

一方のキュラキュラと人類の交流については、村人達との和解は描かれませんが、キュラキュラが、キルとキリの二人の人間との交感を成功させたという点に、救いが見られる。キュラキュラは、命を落とすという不幸に見舞われるが、亡くなるときに外見のもたらす誤解が解けたキルとキリに「もっと早くに知り合えばよかった」と告げている。怪物が、創造主であるフランケンシュタインからも見捨てられ、「つながら」を断ち切られているのに対し、キュラキュラは、少なくとも自身の死を悲しみ、涙を流してくれる人間と出会うことが出来たのである。⁶⁾

2.4 結末について

『フランケンシュタイン』の結末では、怪物が、自ら火に身を投じるつもりであるとウォルトンに告げている。怪物が実際に死んだか否かは、明確にはされないが、怪物の自死が示唆される。一方、キュラキュラはキルの矢による傷が元で死亡する。その死後、赤いヒナゲシが生え、キュラキュラが、ヒナゲシに転生していることが示されている。次に引用するのは、「キュラキュラの血」の結末である。

キュラキュラはそれっきり息がたえました。

その次の年、山はいちめんにもっ赤なヒナゲシの花が咲きました。まるでキュラキュラの血のような色に。（「キュラキュラの血」115）

ここでのキュラキュラのヒナゲシへの化生は、「虞美人草」の故事を彷彿とさせる。「虞美人草」は、ヒナゲシの別名で、その起源譚が、「虞美人草」の故事である。楚の武将・項羽の愛妾だった虞美人が、項羽の足手まといになるまいと自害し、その流した血から虞美人草が生じたというものである。なお、夏目漱石（1867－1916）が、この逸話を踏まえ、『虞美人草』（1907）を書いている⁷⁾（ただし、ヒロイン藤尾は、悪女に設定されている）。

「虞美人草」の故事と「キュラキュラの血」では、女性の花への化生と怪物の花への化生という相違があるが、死をきっかけにして、花が生まれるというモチーフは共通する。また、ケシとヒナゲシは、厳密に言うとは原産地が異なる別種であるが、ワーテルローの戦いで流された血からケシが生じたという伝承もある（ミッドフォード 1997）。そのことに加え、死後ケシ以外の植物に転生した神話・民話は広く伝えられている。⁸⁾

やなせは、この花へと化生する展開の着想源が何に依拠したものかは、明言していないが、「虞美人草」の故事や、口承文芸中の植物への化生譚をやなせ流に受容した可能性があるだろう。

このように、結末では、一度死したキュラキュラが、ヒナゲシに転生したことが示唆されている。一方、怪物は、その生死が不明確になっており、生死不明という点ではアンパンマンも同様であった。『フランケンシュタイン』、「アンパンマン」、「キュラキュラの血」の結末は、生存の可能性（転生を含む）を残す「開かれた終わり」という点で共通していた。結末で、キュラキュラが美しいヒナゲシに転生したことは、やなせが与えたキュラキュラにとっての救いと言えるだろう。

おわりに

「アンパンマン」と「キュラキュラの血」には、『フランケンシュタイン』からの受容の痕跡がうかがわれた。アンパンマン、キュラキュラ、怪物のあいだには、外見の醜さ、恐ろしさが原因で、人間から忌避、迫害されるという共通点があった。

また、三者ともに、その生存の可能性（転生も含む）を残しており、物語の構造の類似が指摘出来た。やなせが「キュラキュラの血」の主題として挙げた「醜悪と美」を、『フランケンシュタイン』も「アンパンマン」も内包していたのである。

以上、『フランケンシュタイン』が、「アンパンマン」の着想源であるというやなせの発言を頼りに、「アンパンマン」と同じくやなせ作の「キュラキュラの血」への受容を考察した。⁹⁾ その結果「アンパンマン」だけでなく、「キュラキュラの血」にも『フランケンシュタイン』に通底するテーマが描かれていることが分かった。やなせにとって『フランケンシュタイン』は、この二つの童話の創作において、重要なインスピレーションの源泉であったと考えられる。

註

- 1) やなせ自身の著作『アンパンマンの遺書』（1995）や、文化人類学者の出口顯による生前の取材（出口, 2001）などに、『フランケンシュタイン』が『アンパンマン』の着想源であることが語られている。ちなみに、出口は、臓器移植の文化記号論的考察の事例として「アンパンマン」を採り上げている。
- 2) やなせは、「原作の怪物ははるかに知的で抒情的である。ぼくは映画の印象が強かったので、最初に原作を読んだ時、地味な手紙体からはじまることに違和感をおぼえた」（『アンパンマンの遺書』 199）と述べており、続いて「ぼくのアンパンマンは『フランケンシュタイン』の影響を強くうけた」と語っている。ちなみに、イギリス訪問時に、メアリー・シェリーの肖像画を購入したそうである。
- 3) 科学史家のスティーヴン・J・パインは、「新しい火」という概念を紹介している。これは、重火器や原子力工学などの科学技術を比喩的に表現したものである。ちなみにこの語は、「産業化された火」とも言い換えられている（パイン, 2014）。
- 4) 戦後の貧困体験が、飢えた人々にアンパンを渡すという設定に、パンが生命をもつという設定を『フランケンシュタイン』から受容し、『青い鳥』に登場する妖精のイメージをアンパンマンに付与した。これらが、「ぼくの頭脳にインプットされていて、フランケンシュタインと合体してアンパンマンになったと思う」（『アンパンマンの遺書』 200）と述べている。
- 5) やなせは、「解説」だけでなく「読まないで批評文をかこうとするひとのための親切なガイド」も付記している（『十二の真珠』 126）。この「ガイド」は、やなせの遊び心が示されている。やなせは、自分は「高邁」で「ためになる本」は読んでいないと謙遜しているが、『フランケンシュタイン』の怪物が拾った本にも目を通してしている。その内の一冊であるゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749–1832）の『若きウェルテルの悩み』（*Die Leiden des Jungen Werthers* 1774）と『フランケンシュタイン』の書簡体小説という共通点に触れ、その影響関係について想像もしている（『アンパンマンの遺書』 199）。
- 6) 小野俊太郎は、『フランケンシュタイン』の物語中で、“union” という語の重要性を指摘している（小野 2015）。小野は、“distance” という語が、『フランケンシュタイン』のテキストの最後の語であることを述べた上で、物理的・心理的な「距離」が解消された状態が、“union” としている。ただし、これ以上は言及されず、次の論点へと移行している。
- 7) 漱石における「虞美人草」の故事の受容については、（新関, 1998）に簡単に言及されている。ただし、藤尾の人物造型は、ヒナゲシよりも阿片の材料となるケシの花のイメージが強いとしている。
- 8) 血のもつ呪力が、植物の誕生につながるという観念は、豊作祈願等の予祝儀礼で、家畜の血を散布する事例に端的に現れている（辰巳, 1999）。
- 9) 『フランケンシュタイン』が重要なモチーフとなる映画として、ビクトル・エリセ（Victor Erice, 1940–）の『ミツバチのささやき』（1973）がある。エリセは、偶然にもやなせと同じく『フランケンシュタイン』とメーテルリンクを『ミツバチのささやき』の着想源としている。ただし、原作よりもホエール監督の映画『フランケンシュタイン』からの影響が大きく、メーテルリンクからは、『青い鳥』ではなく、観察記『蜜蜂の生活』（*La Vie des Abeilles* 1901）を劇中で活用している（斎藤, 2000）。

参考文献

- 小野俊太郎『フランケンシュタインの精神史：シェリーから「屍者の帝国」へ』彩流社、2015年.
- グールド, スティーヴン・ジェイ『干し草の中の恐竜 化石証拠と進化論の大展開』渡辺政隆訳、早川書房、2000年.
- 斎藤綾子『沈黙の言語、視線の言語』『E/M ブックス 8 ビクトル・エリセ』エスクァイア・マガジン・ジャパン、2000年.
- 辰巳和弘『風土記の考古学 古代人の自然観』白水社、1999年.
- 出口顯『臓器は「商品」か 移植される心』講談社、2001年.
- 新関公子『『虞美人草』の屏風をめぐって』『『漱石の美術愛』推理ノート』平凡社、1998年.
- パイン, スティーヴン・ジェイ『図説 火と人間の歴史』生島緑訳、原書房、2014年.
- 廣野由美子『批評評理論入門 ―『フランケンシュタイン』解剖講義』中央公論社、2005年.
- ミッドフォード, ミランダ・ブルース『サイン・シンボル事典』若桑みどり訳、三省堂、1997年.
- やなせたかし『アンパンマンの遺書』岩波書店、1995年.
- 「アンパンマン」『十二の真珠』復刊ドットコム、2012年.
- 「キュラキュラの血」上記掲載書所収.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. Harmondsworth: Penguin, 1992. Print.

Reception of *Frankenstein* in Yanase Takashi's Fairy Tales

DOAI Hironori

Summary: This study argues on the influence of Mary Shelley's *Frankenstein* in Yanase Takashi's fairy tales. Specifically, I take up Anpanman and Kyurakyura no Chi for discussion. The motifs of ugliness and the oppressed person are shown in these two fairy tales as well as in *Frankenstein*. Through comparison of both writers works, it can be considered that Yanase found important source of ideas for his works in *Frankenstein*.